

『熱気球でラクダまで』

✱

死んだ魚のような目をして泳いでいたら、釣り上げられた。

その場ですぐに三枚におろされそうになったから、『何でもしますのでそれだけは勘弁してください』と懇願すると、『話し相手になってくれるなら』と提案されて、一命を取り留めた。

「……なにかを諦めて割り切らないといけねえのに、それが出来ない自分が腹立たしい。オレは、どうすればいい？ どうすればきっぱりと割り切れるようになる？」

名前も知らないオジサンの話が八時間もつづいている。

「夢を見るのが人間だと思わねえか？」

さくつと終わると思いついていた自分自身に嫌気が差せば差すほど、終わりが見えない事に対する恐れが膨れ上がって、消極的な世界の住人として自分の浅はかさを誰かのせいにしたくて仕方がなかった。

「なあ、どうすれば割り切れる？ 頼むから、教えてくれ！」

忘れられない記憶を思い浮かべているのだろうか？ 取り乱したオジサンの情緒は果てしなく不安定にみえて目頭から流れ落ちる涙を指先で拭っていた。

僕は、『三枚におろされた方が楽だったのかもしれない』と心の中で思ったけど、直接伝えるともっと大変なことが起こりそうな予感がしたから、じいっと、待つことにした。

「なあ、オレはオマエさんの名前も知らねえけどよ、こんなオレの話を長々と聞いてくれて心から感謝してる。感情的になってしまったことは、すまねえ。けどなあ、オレにも……色々、あるんや」

オジサンは、

自分自身の振る舞いを顧みるように、
ひとつ、大きく息を吸って、深く息を吐いた。

「こんなに大きな船なのに、今はもうオレだけしかおらんくなった。出港した時は軽く五十人は乗ってたんとちゃうかな？　くだらないことでバカ騒ぎして、みんなで笑って、毎日がお祭りやった」

波打つ記憶が、オジサンの頭の中を泳いでいるようだった。

「寂しいなあ。みんな、どこ行ったんやろ？　理由も分からん。ナニでどこまで連れて行かれたのかも分からん。ここんとこ独りぼっちが続いてたから久しぶりに話し相手が出来て嬉しかったんやあ。すまんなあ。オレばかり喋ってしまったてオマエさんの話を一つも聞いてやれてねえ……でも、嬉しいなあ……話を聞いて貰えるだけで心が落ち着いていく……なあ……手え、握ってもええか？」

僕は、オジサンの想いを丁寧に受け止めてから、言葉を返した。

「握るんやったら、お寿司にして下さい」

終始、曇り模様だったオジサンの表情がパアツと晴れやかになって、ひとつ、ふたつと時間が流れた後、決め台詞でも言うかのように言葉が放たれた。

「ほな、行こか」

オジサンの背中を追って、船内を練り歩く。

*

「へい、おまち。マグロをどうぞ」

すべてのネタが絶品だった。特にシャリの具合が極上で米粒一つ一つを深くまで味わえている舌ざわりに感動を覚えていた。

本格的なカウンターテーブルに六席分の椅子が並んでいる。船に備え付けられているとは思えないほど手が込んでいて、色彩も音楽も香りも味わいも、和の世界観に包み込まれているようで、心が穏やかになっていく。

「へい、おまち。ハマチをどうぞ」

オジサンの顔つきが、生き生きとしている。

船上の寿司職人として長年みんなの胃袋を掴んで離さなかったのだろう。言葉を交わさなくてもオジサンの立ち姿や表情を見れば一目瞭然だった。空間の虜になっている僕は、溢れる敬意を込めて伝えた。

「一流の寿司職人やったんですね」

オジサンは、恐れ多いと言わんばかりに首を横に振った。

「ちゃうちゃう。握り始めて三ヶ月のド素人や。昔は専属の寿司職人がおったんやけど、ある日突然おらんくなった。物凄く慎重な人やったから神隠しにでもあったんとかちゃうかって大騒ぎになって、二日経っても三日経っても戻ってこへんから手掛かりを探すために朝から晩までみんなでビンゴゲーム大会や。リーチになったらまた一から始めるルールやったから、なかなかビンゴまでたどり着けなくてなあ。やっぱりビンゴは難しいなあって言いながらみんなで社交ダンスして大盛り上がりやったで」

ツツコミどころが山ほどあったけど、最も疑問に感じたのは、『三ヶ月でこんなに美味しい寿司が握れるようになるのか』という事だった。

カウンターを挟んで、二人で会話を積み重ねていく。大将の役割を担っているからだろうか？ オジサンは、聞き役に徹してくれた。僕が話すことを一切否定せずに、相槌打って、必要な質問を投げかけてくれて、僕の本音を引き出してくれた。

どうして服を着て泳いでいたのか。

どうして三枚におろされたくなかったのか。

どうして地球は丸いのか。

気が付けば自分でも知らなかった本心まで導いてくれて、『僕はこんなことを思っていたのか』と、初めて耳にする言葉の数々を口にしながら自然の成り行きで安心感を抱いていく。

「今更なんですけど、オジサンの名前、教えて貰ってもいいですか？」

オジサンの手が、ピタリと、止まった。

「……オレ、男子じゃないで？」

頭の中に宇宙船のようなモノが現れて、不規則な動きをして、消え去った。

「へい、おまち。カリフォルニアロールをどうぞ」

一瞬、沈黙が訪れて、気まずい雰囲気になるかと思ったけど、全くそんなことなかった。今までの言葉のトーンを崩さずに、質問を投げてくれて、相槌を打ってくれて、あっという間に不協和音を拭い去ってくれた。せせらぐように寿司を握って、天ぷらも茶碗蒸しも、デザートには特製のティラミスまで振舞ってくれた。

「一生懸命作った料理を誰かに食べて貰えるって幸せやねえ」

僕は、心の底から、『ごちそうさまでした』と伝えることが出来た。

「お粗末さまでした……もうお腹いっぱいか？」

「はい、心もお腹も満たされました」

「それはよかった……ところで、卓球は得意か？」

僕は昔、卓球部だった。

目と目が合っただけで、行き先は決まっていた。

「ほな、行こか」

オバサンの背中を追って、船内を練り歩く。

*

ピン、ポン、

ピン、ポン、

ピン、ポン、

地下の一室で奏でられるラリーの応酬。

続くにつれて、二人の間合いが重なっていく。

何気ない会話から始まって、膨れ上がって派生して、新たな展開に移り変わって、質問して答えて、答えて質問して、共通の話題で盛り上がって、

ピン、ポン、
ピン、ポン、
ピン、ポン、

会話のラリーが、心の扉を開かせる。

「五十人も乗ってたってホンマですか？」

「おったなあ」

「なんで今、一人なんですか？」

「みんなおらんくなってしまったんや」

「なんでですか？」

僕が打ち返した玉を、オバサンは打ち返さなかった。

跳ねるピンポン玉の音が、やけに胸に突き刺さる。

「それが……分かんねん」

転がるピンポン玉を拾い上げたオバサンが、サーブの体勢に入った。

「四か月前にみんなで出港したのに、一週間後、寿司職人がおらんくなってな。その五日後に一人おらんくなって、次の日に三人まとめておらんくなって、その次の日に船長とオレ以外おらんくなって、最終的にな……船長もおらんくなってしもうてん！」

オバサンのサービスエースが、華麗に決まって、僕の負けが確定した。

勝負ごとに二言はない。試合前に定めた約束事を守るために口を開いた。

「……参りました。あなたの夢を教えてください」

急に白々しい態度を表すオバサンから声が聞こえてくる。

「え、ホンマに言わなアカンの？」

勝った方が夢を語ると言って、なにがなんでも勝ちにいかうとして、あれだけ夢を聞いて欲しそうな素振りをみせていた……のに？

「……分かった。言えばいいんやろ」

渋々言わされているような状況を一瞬で作り上げたオバサンの高度なテクニックに魅了されている僕は、次に放たれる言葉を素直に受け止める態勢に入らされていた。

「大好きなオレンジに囲まれて生きるために、オレは……パイロットになる！」

今からパイロットを目指すには相当な鍛錬が必要になるに違いない、と未来を見据える僕の思考は、あらゆる可能性を探り始めていた。

「差し支えなければでええんですけど、オバサンお幾つですか？」

「失礼やなあ。オレ……今年十九歳やで」

頭の中に宇宙船のようなモノが二台現れて、不規則な動きをして、消え去った。

「せやから、こんなことしてる場合ちゃうねんて！」

僕の戸惑いをよそに彼女は、『ちょっと風、浴びてくる』と言った。
オネエサンの背中を追って、船内を練り歩く。

*

「空を自由に羽ばたきたい！」

エメラルドブルーに四方を囲まれて、水平線と目が合っている。
最上階のバルコニーで佇む僕たちは、時間を忘れて風に吹かれた。
言葉なんて必要のないくらい、空と海が青かった。

「なあ、少しだけ語ってもええか？」

オネエサンの想いが、
自然の美しさによって、
生まれ落ちようとしている。

僕は、何も言わずに、

産声を待った。

「……オレ、オレンジが大好きでなあ。小さい頃からオレンジばかり食べててん。忘れもせんわ……小学三年生の夏休み。婆ちゃんと一緒に山に登って二人で空を見上げてたらな、『空にはオレンジが山盛りあるからパイロットになったら好きだけ食べられるで』って、婆ちゃんに言われてん。幼かったオレは目を輝かせて信じて猛勉強し始めた。でもなあ、年を重ねると婆ちゃんの言葉が冗談やっただけことを知ってな。なんやねんって思っただけど、そのとき婆ちゃんはまだ天国に旅立ってた」

オネエサンは、当時を振り返るように、ひとつ、時間を空けた。

「空にはオレンジがないって分かったけど、パイロットになりたいという想いは日に日に強くなっていった。でもなあ、色々あって挫折した。あるとき、全部が嫌になってん……前を向いても後ろを向いても道が塞がれているような気持ちが続いてな……ほんで生きる目的を見失って死んだ魚のような目えして毎日港で項垂れてた。そしたらな？ 知らん人間にいきなり怒鳴られてん。なんちゅう瞳しとんねん！ 死んだ魚よりも死んだるぞ！ いい加減にせえ！ もっと楽しめ！ ワシの船に乗ったら絶対楽しませてやるからついて来い！ って……これが不思議でなあ。その人の輝いた瞳を見たら誰でも付いて行きたくなってしまうねん」

オネエサンは、当時を深く振り返るように、みつつ、時間を空けた。

「……船長はなあ、いっぱい遊んで、いっぱい食べて、いっぱい魚も釣って、何でもできる船にしたいって言うてた。いずれはお客さんも呼べるようにして楽しんで欲しい。でも、まずは自分たちが楽しんでからや！ って、言うてた。もうすぐ世代交代やから次期船長はオマエや！ でも、オマエはまずパイロットになつてからや！ それまで頑張るからオマエも必死こいて頑張れ！ って、事あるごとに背中を押してくれた」

僕たちは、オレンジ色の太陽に、照らされている。

おもわず、想いを伝えていた。

「港に戻ってパイロットにならないんですか？」

オネエサンは、『アホか』と言った。

「今オレが戻ったらみんなが戻る場所がなくなるやんか。みんなが安心して戻って来られ

るように船を出しとかなアカンやんか。でもなあ、待っても待っても戻ってこうへんことほど寂しいものはないで。船の上で浮かんでくのは楽しかった思い出ばかりや。ほんでな、薄々気づいてんねん。もう戻ってこうへんのやろうなあ……って」

ふわっと、その場で湧き出た想いを伝えるのは失礼な気がして、オネエサンの言葉を、じいっと、待つことにした。

「……みんな無事やったらええし、みんな同じ場所でワイワイやってるならそれでええねん。でもなあ、そこにオレもおられたらもつとええなあって思ってしまうねん……短い期間やったけど、ホンマによくしてくれて、色々教えてくれて、生まれて初めて、心の底から楽しい！ この人たちをもつと喜ばせるために頑張ろう！ って、気持ちになれてん。船に乗ってみんなの生き生きとした姿見てたらな？ もう一回、パイロット目指したい！ って、気持ちも芽生えてきてんねん。やからそろそろ諦めて割り切らなアカンのも知ってんのに、『もしかしたら明日戻って来るかもしれない』って、考えたら割り切れへんねん。オレにとつて、かけがえのない家族になってしまっただけでんねん。自分の夢を叶えるよりも、みんなの帰りを待つために意地でも戻らねえって……人生掛けてみんなの帰りを待つんやって……決めてん！」

この船は……何なの？

誰が操縦してるの？

どこに向かっているの？

一人称がオレ？

てか、お婆ちゃんなんでそんなこと言うたん？

なんで寿司を握るのがこんなに上手なの？

みんな、ナニでドコまで連れて行かれてしまったの？

色んな疑問が浮かんできたけど、

海を見渡せば、『そんなことどうでもいいでしょ』と思い浮かぶくらい、穏やかな世界が、包み込んでくれていた。

僕は、釣り上げてくれて、お寿司を握ってくれて、卓球を楽しませてくれて、沢山喋ってくれて、沢山話を聞いてくれた仲間想いのオネエサンに伝えていた。

「今の話、船長が聞いたらなんて言うと思いますか？」

聞きたくない言葉を投げ掛けてしまったからだろうか？ 突然、最上階からおろされそうになったから、『何でもしますのでそれだけは勘弁してください』と懇願すると、オネエサンは、固まったまま動かなくなった。

風が吹いて、

波が打って、

太陽が輝いて、

見渡す限り、青かった。

しばらくして、『船、一緒に降りてくれへんか？』と、提案された。

*

港に着くまでの間、

ふたりで色んなことを話した。

僕の歩んできた人生も、

オネエサンの歩んできた人生も、

一筋縄ではいなくて、

だから話が尽きなくて、

笑って、怒って、悲しんで、

涙を流して腹を抱えて、

本音を交換しているうちに、

生きるってこういうことなんかなあ、

と、思えた瞬間があったけど、

そんなのすぐに消え去って、

笑って、怒って、喜んで、

明日は明日の風が吹くのだろう。

船を降りる直前、

オネエサンが言った。

「手え、握ってもええかあ？」

僕は、彼女の想いを丁寧を受け止めてから、言葉を返した。

「握るんやったら、お寿司握って下さいよ」

オネエサンの手が、僕の手に触れる。

「これから毎日握ってやるから、今はオマエさんの手えを握らせて」

海は、

広くて、

大きくて、

予想を遥かに超えていく。

鮮やかに舞うカモメが二羽、鼻糞をほじって飛ばして、飛び去った。